

伊東寿泰先生，竹内謙彰先生，中村 正先生，長澤克重先生， 増田幸子先生の定年ご退職にあたって

産業社会学部長 黒田 学
社会学研究科長 三笥 利幸

この度、伊東寿泰先生、竹内謙彰先生、中村 正先生、長澤克重先生、増田幸子先生の定年ご退職を迎えるにあたり、産業社会学部・社会学研究科を代表して、挨拶をさせていただきます。

伊東先生、竹内先生は17年間、中村先生、長澤先生は35年間、増田先生は23年間、産業社会学部・大学院社会学研究科での教育・研究活動等を通じて立命館大学全体の教学発展に貢献され、多くの卒業生・修了生を社会に輩出してこられました。以下、それぞれの先生のご経歴を簡単に紹介させていただきます。

伊東先生は、新約聖書学と言語学を専門とされ、ヨハネ福音書を中心とした新約聖書の文学的・言語学的研究、言語学（語用論）を用いた英語教育研究を研究課題として研究に従事されてきました。新刊では、単著として『これが変わる！あなたの英語力！～英語の環境作りのススメ～』（ヨベル）を執筆され、英語学習の環境づくりを提唱されています。また、共著として『ここが変わった！「聖書協会共同訳」新約編』（日本キリスト教団出版局）などを執筆されています。

また、先生は、学部役職、全学役職を歴任され、産業社会学部・英語コーディネーター、言語教育センター・英語運営委員等を定期的にお務めになり、国際化教学の立案と遂行に数多くの貢献をなされました。

竹内先生は、発達心理学・教育心理学を専門とされ、学童期における発達の質的転換期に焦点を当てた子どもの発達的特徴に関する研究、自閉症スペクトラムを中心とした発達に困難を持つ子どもならびに保護者に対する支援に関する研究、空間認知の発達と個人差に関する研究などを研究課題として研究に従事されてきました。最新刊では、単著『主体的な学びの探求』（クリエイツかもがわ）を執筆され、主体的に学ぼうとする態度を形成するには、何が関係しているのかを問い、自己評価の質問紙調査を通して、主体的な学びへの態度、人生満足度との関連等を検証されています。その他、多数の著書、論文を執筆されています。

また、先生は、学部役職、全学役職を歴任され、数多くの貢献をなされました。まず、主な学部役職としては、産業社会学部人間福祉専攻長、同副学部長を務められた後、2017年度から3カ年にわたって産業社会学部長（社会学研究科長兼任）として、学部・研究科教学のためにご尽力頂きました。全学役職としては、学校法人立命館常任理事・評議員を務められ、特別ニーズ学生支援室アドバイザー、障害学生支援室アドバイザー、立命館大学・立命館附属校ハラスメント防止委員会委員、同相談員を歴任されました。

中村先生は、社会病理学、臨床社会学、社会臨床学を専門とされ、また、男性性研究もなさっています。こ

うした専門的知見を生かし、暴力問題について研究を深めてこられました。DV や虐待はもちろん差別や社会的排除といったさまざまな暴力について、被害者を生み出す制度や文化の変革のために臨時的な取り組みもなさいました。旺盛な研究の成果は、『「男らしさ」からの自由』『家族のゆくえ』『ドメスティック・バイオレンスと家族の病理』など多数の著書・共著書・訳書として発表なさっています。

また先生は、全学役職を歴任され、多くの貢献をなされました。1997年から教学部副部長を務められた後、アドミッションズオフィス室長や情報化推進機構長、教職教育推進機構長などを歴任され、2013年からは総長特別補佐を、2015年からは学長特別補佐を、2017年からは立命館大学副学長を務められ、その後、再び学長特別補佐を務められました。

長澤先生は、理論経済学、統計経済学を専門とされ、多くの研究をなさいました。最近のものでは、「企業消費者間電子商取引に関する日本の公的統計の課題」（『立命館産業社会論集』第58巻第1号）において、デジタル経済化の進展が一層予想される現在、企業消費者間電子商取引に関する主要な公的統計間に見られる著しいギャップのために、その信頼度を損ねることがないように求め、「アマゾンのパラドクス——経営戦略と反トラスト法」（『立命館経営学』第60巻第6号）では、優秀な戦略が反トラスト法に抵触するという「アマゾンのパラドクス」を是正するために、オンラインプラットフォームの透明化等によって非違行為を抑制する施策の可能性を追求することを示され、その他多くの著書や論文を発表なさいました。

また、先生は2005年から大学院部副部長、2006年からは教学部副部長、さらに2017年からは学生部長と、全学の役職を歴任されました。学部でも、2011年から副学部長、2017年からは障害学生支援室室長を務められ、全学および学部ためにご尽力いただきました。

増田先生は、言語文化学を専門とされ、映像メディア研究、映像メディアの表象分析、日本のテレビドラマ研究を研究課題として研究に従事されてきました。単著として『アメリカ映画に現れた「日本」イメージの変遷』（大阪大学出版会、2004年2月）の刊行をはじめ、多くの著書・共著を執筆されました。論文については、近年では、「NHK 連続テレビ小説における「1945年8月15日」の記憶（上）（下）」（『立命館産業社会論集』第56巻第4号および第57巻第1号）を執筆されるなど、研究を精力的に進めておられます。

また、主な学内役職は、産業社会学部副学部長、大学院委員をお務めいただき、学部・研究科教学のためにご尽力頂きました。

5名の先生方は、在籍された期間や専門領域がそれぞれ異なりますが、その専門性と研究を通じて、学内外の研究活動、社会活動に貢献されました。とりわけ、「現代化・総合化・共同化」に基づく学部・大学院教学の中心として、その充実と発展にお力を傾注されました。今日の社会諸課題に対する鋭い考察と言及は、現代社会へ警鐘をならすと共に、私たちの社会の目指すべき方向性を示唆されています。私たちは、先生方の研究と教育に貢献された足跡、学問に対する真摯な姿勢と識見から多くを学び、継承し発展させていくこと、立命館大学の民主主義を守り展開させていくことこそが、後進である私たちの先生方に対する感謝の証となるものと考えます。先生方、長年にわたり本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、先生方のますますのご活躍とご健康、ご多幸を心より祈念申し上げます。